

「妙高市民の心」作文 優秀作品集（中学生の部）


最優秀賞

曾祖母から学んだこと

妙高高原中学校 2年 ことう後藤 りょうすけ涼祐

私には私たち兄妹をととてもかわいがってくれた曾祖母がいました。曾祖母は足腰が弱く歩行器を使う生活をしていました。足をひきずり歩行器を押す姿は、とても弱々しく辛そうでしたが、私達の前ではいつも明るい笑顔を絶やさずに振る舞い続けていました。

私は、そのような曾祖母の世話をしたいと思ったのは小学校二年生の頃でした。最初は何をしたらよいのか分からず戸惑ってしまいました。しかし、曾祖母の気持ちを考え、自分が歩行器を使っていることを想定し、そうされたらうれしいと思うことを考えながら行いました。主に行ったことは、部屋の出入りの時に戸を開けてあげることに、曾祖母と話をすることでした。曾祖母は、私の十倍くらいの長い人生経験を積んでいることもあり、話す内容に深みがありました。例えば、戦時中の暮らしの話です。戦争の影響で、栄養が整った食事が摂れず、芋が中心の毎日であつということ。また、けがをしても医療費がとても高く、治療を受けなかったということ。これらの事実は、小学生の私にとっても衝撃的であり、同時に戦争の悲惨さを感じ取る機会でもありました。私は、曾祖母の話に興味をもつだけでなく、曾祖母の生き方から学ぶことも多くありました。印象に残っていることは、「どんな






困難に直面してもその時代を「一生懸命生きる」という話です。今から約八十年前は、機械が無く、物を作る仕事は全て手作業であったということです。その上、長時間労働をしないと生活が成り立たないので、生きていくためには長時間労働は必要不可欠の時代だったということです。私は、この話を聞いて、一生懸命生きることの大切さを知り、またそのような時代を生き抜いてきた曾祖母に尊敬の気持ちを抱きました。曾祖母は百歳でこの世を去りました。悲しさがいつまでも続く一方で、大好きな曾祖母が亡くなったことを受け入れずにいる自分もいました。

曾祖母が亡くなって二年後の冬のことでした。下り坂で転んで立ち上がれないお婆さんを見つけました。足の不自由な曾祖母と、立ち上がれないお婆さんの姿が重なり、私はすぐに手を差し伸べ、お婆さんを安全な所まで連れて行くことができました。お婆さんは、少しおぼつかない足取りでしたが、私はしっかりと最後までお婆さんを見送り、その場を後にしました。このことは、私が曾祖母の世話や触れ合いの経験があったからこそできたことで、もし、その経験がなければ、すぐに行動に移せなかったと実感しました。

私は、曾祖母と触れ合うという経験により高齢者の話に耳を傾けることや、困っている高齢者を見たら、すぐに助けるという行動力を自然と身に付けることができました。今後は、少子高齢化時代を迎えます。私たち若い世代の役割も増え、高齢者の生活を支えていくことが求められます。私は、高齢者が安心して楽しく生活できる社会になることを願い、自分ができることから始めていきたいです。





優秀賞

大切なんだよな

新井中学校 3年 わたなべ 渡邊 きらり 輝星

「あいさつは大切です。」と中学一年の時、先生が言っていました。私は、深く考えずに、とりあえずやっておこうと思う程度でした。しかし、いろいろな場面で繰り返し「あいさつは大切です。」という話を聞きました。やがて私は、「あいさつは本当に必要なのか。」と疑問を感じるようになりました。でも、そんな私が今では「あいさつは大切です。」と声を大にして言いたいと思うようになりました。それは、ある出来事がきっかけでした。

私が、あいさつの大切さに気付かされた出来事とは、中学二年の時の職場体験のことです。事業所の人から「仕事を一生懸命やることは、もちろん大切なことだけれど、あいさつと返事もとても大切です。」と話がありました。そして、なぜ大切なのかを説明してくれました。理由は、どんなあいさつや返事をするかで、その人の印象が決まってしまうからだそうです。あいさつからやる気や真剣さなどが、相手に伝わるそうです。そう言われた時、私はその通りだと思いました。そして、これまでの自分を振り返りました。とりあえずやっておこうと思いながらしていた私のあいさつは、きっとやる気や活気がなく、悪い印象を与えていたに違いありません。

私はその日から、職場体験で出会う全ての人に、会ったらまず自分から積極的に






あいさつをしました。また、誰かに呼ばれたら、しっかりと大きな声で返事をするように心がけました。私は、あいさつの大切さを知ったことで、あいさつや返事のもつ意味を今まで以上に考えることができました。自分自身を表すことになるあいさつを、もっと大切にしなければと思うようになりました。私は、職場体験終了後は、学んだことを学校生活にもいかしました。そして、あいさつや返事をこれまで以上に大切にするようになりました。

さらに、学校外でも実践しています。例えば、私は休日の朝は散歩をしています。家の近所では、朝早くから畑仕事をしている方をよく見かけます。そこで、私はいつも自分からあいさつをしています。すると、相手の方も笑顔であいさつを返してくれます。あいさつを交わすことが、こんなにも気持ちが良いと思えるようになった自分に大きな変化を感じます。そして、何よりも地域の方との何気ないふれあいを通して、気持ちの良い朝を迎えられることに喜びや嬉しさを感じます。あいさつを交わすことで、自然と地域の方々の良い関係を築くことができます。時には、あいさつだけでなく、会話をすることもあります。人と人とのつながりは、こんな風にあいさつがきっかけとなり、広がっていくこともあるのだと知りました。

私は、職場体験をきっかけにあいさつや返事は、人の印象を決めるだけでなく、地域の人との交流や自分自身の成長につながることに気づくことができました。これからも、あいさつや返事を大切に、新たな出会いや発見を求めて行動していきます。





優秀賞

お年寄りを支えよう


妙高高原中学校 3年 すかだ 須賀田 こはく 虎珀

私たちの地域には、お年寄りの方が多いです。よく畑仕事や買い物、散歩などをしています。その中には、体の不自由な方もたくさんいらっしゃいます。

僕が部活動の自主練習で町を走っているとお年寄りに会います。あいさつをするとうれしそうにあいさつをしてくれます。時には、体が不自由な方に会うことがあります。

ある日、走っていると、買い物の荷物が重くて立ち止まっている方がいました。僕は、「大丈夫ですか？お手伝いしましょうか？」と言って手伝い、家まで荷物を持って一緒にゆっくりと歩きました。歩きながら学校であったことや最近楽しかったことを話しました。家に着くと、そのおばあちゃんから「ありがとう」と言ってもらってとてもうれしかったです。お年寄りを手伝うことはとても気持ちのいいものだと思いました。

その一週間後、また、違うお年寄りがうずくまっていて、僕はのぞき込みました。すると、顔色が悪かったのでこれはまずいと思い、声をかけました。僕は、お年寄りを「家まで送ってあげよう。」と思い、「家まで送りますよ、家まではどのくらいの距離ですか？」と聞くと、「2 kmあります。」とのことでした。僕は妙高高原メッセから2 kmなのでいけると思い、すぐおんぶをしました。家は杉野沢なので、





けっこう登ると聞き、力をふりしぼっておんぶしながら歩き続けました。それから五十分くらいかかって到着しました。

家に到着し、おばあちゃんをおろすと、泣きながら「ありがとう、本当に助かりました。」と、言ってくださってとてもうれしかったです。顔色がよくなるまで二十分ほど様子を見ました。しばらくして顔色がよくなり、とても安心しました。そしてお礼にとご自宅で育てたスイカをもらいました。いただいたスイカはいつもと違う味でとてもおいしかったです。

僕は、この2つの経験から、どのような形であっても体の不自由な人やおじいちゃん、おばあさんを助けることが大切だと思いました。

この地域には、とてもお年寄りが多いですし、体の不自由な方がたくさんいます。しかし手をさしのべない人もいます。僕のおじいちゃんおばあちゃんは遠くにいてめったに会うことができず、日常生活が心配です。けれど周囲に優しくし助け合える人がいるととてもうれしいです。そんな社会になってほしいです。

僕は、まずは自分から地域のためにがんばりたいです。

